



原城跡出土鉛製十字架

# 島原の乱最後の決戦地『原城跡』

## ～天草四郎と一揆衆が立てこもった最後の砦～



長崎の教会群とキリスト教関連遺産を世界遺産へ

徳川幕府を震撼させ、日本を鎖国へ導いたといわれる島原の乱。この地をキリタン文化の花開いた楽園から、血生臭い戦場へと変えたものはなんだったのか。370年の封印された歴史が今甦る。



『信念にもゆる天草四郎』



### ⑤ 本丸門跡 (四郎家)

天草四郎が最後の居宅跡と見られる遺構。本丸の大規模な虎口(出入口)の最奥部に、周囲を石垣で囲まれている門の礎石も見ることができる。絵図「原城諸手仕寄之図」が示す「四郎家」の位置などや、四郎の最後の居場所を記した「細川忠利書状」などとも符合する場所。



### ⑥ 竪穴建物跡群

島原の乱で一揆衆が籠城した際の竪穴建物跡群。1辺が約2m×3mで、石垣に沿って南北方向に9区画連なっていた。集落を基本に家族単位で使用したと思われる。通路をとるなど計画性があり、整然と籠城(ろうじょう)していたことがわかった。さらに冬場の籠城にもかかわらず個別に炬や釜といった暖房や煮炊きにかかわる遺物や遺構の痕跡がなく、籠城中に失火を起こさないようにした大名軍勢並みの軍容の存在を物語るものであり、高い規律を守ったことが明らかで、一揆勢の原城への籠城はたいへん組織的であった。



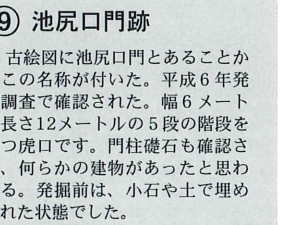
### ⑦ 櫓台跡

天主なるものが建っていたのではないかとおもわれる場所。石垣内の隅の壊された部分に大量の瓦が出土。島原の乱当時の原城は、島原城築城のため石垣など持ち去られ廃城であったというのが定説であったが、残された石垣の数や、瓦の出土などから、乱のときも何らかの建物が残されており、島原城築城のときには石垣を持ち去ってはいないのではないかと考えられている。



### ⑧ 抜け穴跡

この横穴は、原城本丸跡の有明海に面した崖下にあり、海岸から6mの高さにある。現在、草のため行くことが困難である。昭和38年、当時の郷土史家らにより、原城の洞窟が調査された。崖下の一角で、入口からの横穴は狭く、高さ1.4m 幅約1mと一人がようやく通過できるもので、約30mほどのところで、通路は3つに分れ、その奥は広さ3畳ほどの広さがあり、そこには瓦や刀片があったという。原城築城の折、築工されたものが、あるいは乱の時掘られたものか不明であるが、以前、本丸跡に空井戸がありそれに続く抜け穴ともいわれている。(昭和38年、豪雨により原城本丸が陥没。内部は段状で、いちばん深いところで、4.3mの深さがあり、瓦や陶器の破片が発掘され、昔のくわのあとも見つかった。)



に島原城を築いたため、元和の一国一城令により日之江城、原城ともに廃城となった。松倉氏は領民に過酷な賦役と重税を課し、厳しくキリタンを弾圧したため、寛永14年10月25日、一揆が勃発。同年12月3日から男女合わせて3万数千人の一揆勢(天草の領民を含む)が廃城となっていた原城に立て籠もり、新たに堀や土塁などを築き、大量の武器や食糧を運び込んだ。一揆勢は徳川幕府の鎮圧軍を一度は撃退し、幕府軍の司令官であった板倉重昌は討死するが、時の老中松平伊豆守信綱自らが12万という大軍を率いて原城を包囲して総攻撃を命じたため、一揆勢の3ヶ月にわたる抗戦も空しく、寛永15年(1638)2月28日、一揆勢は盟主と仰ぐ天草四郎以下全員が討死して原城は落城した。

## 島原の乱 1637-1638

原城は室町時代の明応5年、東肥前まで勢力を伸ばした日之江城主有馬純純が支城として築城し、時には居城とした。戦国時代に入って有馬氏は肥前6郡を領して最盛期を迎えたが、慶長17年岡本大八事件によりキリタン大名であった有馬晴信は斬首となる。後を継いだ有馬純純も慶長19年日向国景城(延岡)に転封。替わって元和2年大和五條から4万石で松倉重政が領主となった。元和4年松倉重政は新たに

**原城跡発掘調査中**  
平成4年度からはじまった発掘調査により、足下が不安定でご迷惑おかけ致しております。見学の際にはご注意ください

### ① ほねかみ地蔵

明和3年(1766)7月15日有馬村願心寺の注喜上人と、各村の庄屋らがこの戦乱で斃れた人々の骨を、敵味方の区別なく拾い霊を慰めた地蔵尊塔である。文学博士の八波剛吉は、「骨かみ地蔵に花あげる三万人も死んだげな 小さな子供も居たらうに 骨かみ地蔵に花あげる」と、うたっている。

※ 骨と髪が散乱していたものを埋めたことでその名が付いたと云われる。八波氏は、ホネカミとは「骨をかみしめる」の意味。そのことから「自分自身のものにする」さらに「人々を済度する」(助ける・救う)と理解すべきだと言われている。

### ② 原城本丸大手門跡

平成16年、8個の巨大な礎石や水路が階段が発見。この場所は本丸の正面入口に位置しており、本丸大手門と考えられている。桁行4間、梁行2間の建物で重層(2階建)で6尺5寸を一間とする京間の寸法であることから当時最先端であった近畿地方の築城技術にもとづいて造られたと考えられている。

### ③ 空壕

原城本丸跡の入口付近に残る。蓮池と通じて本丸を孤立した「島」にするため、島原の乱の際に防衛のために築かれたものといわれる。島原の乱の際に、籠城の間は竹や木で柱を立て、カヤでその上を覆い、老若男女などの非戦闘員を収容していたところともいう。

### ④ 枅形虎口

平成11年度調査で、最も本丸寄りの虎口(こぐち)を検出した。これにより本丸北側の虎口空間帯の概要が判明し、最初の門から最大で10回も城道を屈曲(くつきょく)させた巨大な虎口空間帯が姿を現わした。その大きさは、本丸の約二分の一という異様な大きさであり、厳重な防御力(ぼうぎょりょく)を備えたプランでもあった。門とおもわれる礎石(そせき)や、門の周囲には玉砂利を敷き詰めてあり、出入口外側の石垣は巨石を用いるなど、本丸の正面玄関に相当するものであった。